

高田
今の新潟縣高田市。

菊池寛
小説家。明治二十二年(二五四九)高松市に生れた。

山國川
大分縣にある。中津市の北方で周防灘に注ぐ。中流以上には有名な耶馬溪の勝がある。

一〇 恩讐の彼方

菊池 寛

實之助は今宵こそと思ひ立つた。彼はがばと起上がると、枕元の一刀を引寄せて、靜かに木小屋の外に出た。それは早春の夜の月が冴えた晩であつた。山國川の水は月光の下に蒼く渦巻きながら流れてゐたが、かうした周囲の風物には眼もくれず、實之助は足を忍ばせて竊かに洞門に近附いた。削り取つた石塊が所々

に散らばつて、歩を運ぶ度毎に足を痛めた。洞窟の中は、入口から来る月光と、所々にくり明けられた窓から射し入る月光とで、所所の白く光るばかりであつた。彼は右方の岩壁を手探りく奥へくと進んだ。

入口から二町ばかり進んだ頃、不圖彼は洞窟の底からくわつ、くわつと間を置いて響いて来る音を耳にした。彼は最初それが何であるか判らなかつたが、一歩々々進むに従つて、その音は擴大して行つて、しまひには洞窟の中の夜の靜寂のうちにとだまするまでになつた。それは明らかに岩壁に向つて鐵槌をおろす音に相違なかつた。實之助はその悲壯な凄みを帯びた音によつて、自分の胸が烈しく打たれるのを感じた。奥に近附くに従つて、玉を打碎くやうな鋭い音は、洞窟の周圍にとだまして、實之助の

聽覺を猛然と襲つて來るのであつた。彼はこの音を頼りに這ひながら近附いて行つた。この槌の音の主こそ、敵了海に相違あるまいと思つた。私かに一刀の鯉口を寛げながら、息をひそめて寄添うた。その時、不圖、彼は槌の音の間々に、つぶやくが如く了海が經文を誦する聲を聞いたのである。

そのしはがれた悲壯な聲が、水を浴びせるやうに實之助の心に徹して來た。深夜人去り草木眠つてゐる中に、唯暗中に端坐して鐵槌を振つてゐる了海の姿が、墨の如き闇にあつて、尙實之助の心眼に歷々として映つて來た。それは最早人間の心ではなかつた。喜怒哀樂の情の上にあつて、唯鐵槌を振つてゐる勇猛精進の菩薩心であつた。實之助は握りしめた太刀の柄が、何時の間にか緩んでゐるのを覺えた。彼は不圖自分自身を顧みた。既に佛心

を得て、衆生の爲に碎身の苦を嘗めてゐる高德の聖に對し、深夜の闇に乗じて、獸の如く、瞋恚の劍を抜きそばめて近寄らうとする。自分を顧みると、彼は強い戰慄が身體を傳うて流れるのを感じた。洞窟を搖るがせる力強い槌の音と、悲壯な念佛の聲とは、實之助の心を散々に打碎いてしまつた。彼は潔く竣功の日を待ち、彼との約束の果されるのを待つより外はないと思つた。

實之助は深い感激を懷きながら、洞外の月光を指して、洞窟の外に這出たのである。

その事があつてから、實之助は洞窟の外の木小屋の中に朝夕を送りながら、心靜かに刳貫の成就されるのを待つてゐた。彼は老僧を打つて立退かうといふやうな峻しい心は少しも持つて

ゐなかつた。了海が逃げも隠れもせぬ事を知ると、彼は好意を以て了海がその一生の大願の成就する日を待つてやらうと思つてゐた。彼一人が爲す事もなく暮らしてゐるにも拘らず、周囲の石工達は寸陰をも惜しんで懸命に働いてゐた。了海の不斷の精神が、何時の間にか石工達の心にも浸渡つてゐるやうであつた。彼等は實之助に對して、朝夕快い挨拶を贈つた。

「お武家様、今日は何所へおはせられた。」などと問ひかけられる度に、實之助は自分の所在のない生活が氣になつて來た。周囲の人々が總べて狂氣のやうに働いてゐる中に、自分一人漠然と暮らしてゐる事が、彼に心苦しく思はれ始めた。二月もかうして暮らしてゐるうちに、彼は不圖思ひ附いた。かうして爲す事もなく待つてゐるよりも、自分もこの大業に一臂の力を盡す事によつ

一臂の力を盡す

て、幾何でも成就の日が早められるのではないかと思つた。それと同時に、復讐の期日が縮められるのではないかと思つた。さう思ふと、彼はその日から石工の群に伍して、槌を振ひ始めたのである。

かうして敵と敵とが相並んで、槌をおろし始めたのである。實之助は、本懐を達する日が一日も早かれと、懸命に槌を振ふのであつた。了海は實之助が出現してからは、一日も早く大願を成就して、惜しからぬ命を孝子の手に授けてやりたいと思つたのであらう、彼は今までも見られなかつたやうな烈しさで、狂人のやうに岩壁を打碎いて行くのであつた。

そのうちに月が去り、月が來た。最初は自分自身の爲に槌を振つてゐた實之助も、この剗貫の大業を爲しがひのある仕事であ

るとさへ思ふやうになつてゐた。阿修羅の如く槌を振つてゐる。了海の姿を見てゐると、彼はその勇猛心に動かされて、ともすれば讐敵の恨を忘れがちであつた。

石工どもが晝の疲を休めてゐる眞夜中にも、この敵同士は黙黙として槌を振ふ事などもあつた。

それは了海が樋口の岩壁に第一の槌をおろしてから、ちやうど二十一年目、實之助が了海に巡り逢うてから一年六個月を経た延享三年九月十日の夜であつた。この夜も石工どもは悉く小屋に退いて、了海と實之助のみが終日の疲労にもめげず、懸命に槌を振つてゐた。その夜の九つに近い頃であつた。了海が力を籠めて振りおろした槌が、朽木を打つが如く何の手筈もなかつたので、力餘つて、槌を持つた右の拳が岩に當つた。その時であつた、

延享三年
西〇六年

彼は「あつ」と思はず聲を挙げた。了海の朦朧たる老眼にも、紛れもなくその槌に破られた小さい穴から、月の光に照らされた山國川の姿が、歴々と映つたのである。了海は「お、う」と全身を顫はせるやうな名狀し難い叫び聲を挙げたかと思ふと、それに續いて、狂したかと思はれるやうな歡喜の泣笑ひが、洞窟を物凄くうごめかしたのである。

「實之助殿、御覽なされい。二十一年の大誓願、今宵端なくも成就致した。」

かう言ひながら、了海は實之助の手を取つて、小さい穴から山國川の流を見せた。その穴の眞下に黒ずんだ土の見えるのは、岸に沿ふ街道に紛れもなかつた。敵と敵とは其所に手を取合うて、大歡喜の涙に咽んだのであるが、暫くすると了海は身を退つて、

端なくも……

必定疑なし

「いざ實之助殿約束の日ぢや。お斬りなされい。かゝる法悦の最中に往生致すなれば、未來は淨土に生るゝ事必定疑なしぢや。いざお斬りなされい。明日ともなれば、石工どもが妨げを致さ

う。いざお斬りなされ

い。」



山 國 川 洞 穴

と、彼のしはがれた聲が、洞窟の夜の空氣に響いた。が、實之助は了海の前に手を拱ぬいで坐つたまゝ、涙に咽んでゐるば

かりであつた。心の底から湧出づる歡喜に響くしなびた老僧の顔を見てゐると、彼を敵として殺す事などは、思ひも及ばぬ事で

松平定信
田安宗武の第七子。
白河城主松平定邦の
養嗣子となり、後幕
府の老中となつた。文政
二年（一八一四）八月、
崇徳と號した。文政
十二年（一八二九）
年七十二

あつた。敵を打つなどといふ心よりも、このかよわい人間の二つの腕によつて成遂げられた偉業に對する驚異と感激の心とで、胸が一杯であつた。彼はいざり寄りながら、再び老僧の手を取つた。二人は其所に凡てを忘れて、感激の涙に何時までもく浸つてゐたのであつた。

（菊池寛全集による）